

授業特別協力者(ゲストスピーカー)報告書

テーマ : 日系ブラジル人のアイデンティティについて
授業特別協力者名 : 小島 クリッシイ リカ 氏
実施日時 : 2022年7月19日(火) 3時限
担当教員名 : 舟木 律子
授業科目名 : 演習 I
履修者数 : 23名

実施結果

日本には現在約280万人の外国人住民が生活しており、「日系ブラジル人」は、そのうち20万人程を占める。中国、ベトナム、韓国、フィリピンに次いで5番目の規模のグループである。「日系ブラジル人」は、20世紀初頭より開始された日本からブラジルへ移民(移住)政策でブラジルに渡った日本人の子孫たちである。1980年代のブラジルでの経済危機、および日本の好景気が相まった1990年の「出入国管理及び難民認定法の改正」によって、当初は短期的な就労目的で来日し、その後多くの人々が定住することを選んだ。しかし、リーマンショック後にはその多くが雇い止めや派遣切りの対象となり、ピーク時に30万人ほどだった数は、10万人ほど減少して現在に至る。

入管法の改正直後に日本に「デカセギ」目的で来日した日系ブラジル人の子どもとして、1995年に栃木県で生まれた小島さんは、5歳まで日本で生活し、その後5年間はブラジルのパラナ州で過ごした。そのため10歳のときに再び日本に戻った時には、日本語が全くわからなかったという。講演では、日本人のブラジル移民の歴史と入管法改正による「デカセギ現象」についての背景説明がなされた後で、小島さん自身の家系図を用いたルーツの紹介、子ども時代のブラジルと日本での経験について語られた。

小島さんが小学校4年生で日本に帰国したときには、日本語や日本の文化がわからなかったため、理由も理解できないまま怒られたり、笑われたり、勉強が理解できなくて苦しい思いをしたという。小島さんの親も日本語や日本の文化、学校制度がわからなかったため、親にも誰にも相談することができなかったと振り返る。その後中学時代には半不登校となり、勉強についていけず、クラスメイトにも馴染めず、孤立した3年間を過ごす。だが高校時代には、熱心な担任の先生からのサポートもあり、小学校の漢字から勉強し、学習用の日本語力を身に付けられたという。大学進学に関しては、担任の先生からの後押しがあり、奨学金や授業料免除の制度も利用できたことで無事進学できた。大学時代にはアルバイトを2件かけ持ちしながら家計を支え、3年生からのゼミでは研究の面白さを知った。大学院進学も考えたが、当時は経済的理由から一旦は就職した。それから数年働いた後に、やはり大学院に進学し、現在に至っている。

お金がかかるためサークル活動を一切しなかったという小島さんが、「大学ってめちゃくちゃ楽しい!!」と感じたのは、ゼミでの研究に打ち込んだ経験からだった。大学4年生で取り組んだ卒業論文のテーマは、日本政府が南米への移民政策を推進するために作成した広告についてで、この研究を通して、なぜ自身の曾祖父たちがブラジルに渡ったのかを理解できたという。

質疑応答では、学生から日本とブラジルの文化や社会慣行の違いや共通点についての疑問から、ブラジルにおける日系人コミュニティに関する質問、日本における日系人コミュニティに関する質問、小島さん自身がどのように日本語を身に付けたのか、自身がそれぞれの社会で経験したことが、もう一方の社会でどのように生かされたのか、あるいは障害となったのか、小島さん自身の現在の研究テーマや将来の計画について等多くの質問が寄せられ、全ての質問に丁寧な回答があった。

これまで労働力としての外国人の受け入れを急ぎ、「人」としてのより総合的な受け入れ体制が整

わなない日本社会で生活し、最も弱い立場に置かれる状況を実際に経験してきた小島さんのお話は、多文化共生についての理解を深めるために、非常に有意義な時間となった。今回の講演会が、今後もますます加速していくと考えられる日本国内の国際化を担う学生たちにとって、多文化共生社会を創っていくための「気づき」を得るきっかけとなったことを願う。

